

教育・啓発活動の記録

子どものSOSにこたえるために一家族と学校が手を結ぶー

心理教育相談室の教育・啓発活動の一環として、2006年11月26日（日）の午後に、3時間にわたって第2回心理教育相談室公開講座「子どものSOSにこたえるために一家族と学校が手を結ぶー」が開催された。この全体テーマは、近年注目されている子どもの不登校やいじめ等の問題に対して、家族と学校が連携して問題解決にあたるための手がかりを探るために設定されたものである。

講師としてはまず、学校側の視点を代表するかたちで、文京区教育委員会教育推進部指導室長（当時）の、山田修司氏に「学校現場から見えてくること」というテーマでお話を伺った。ついで、家族側の視点を考えていくために、跡見学園女子大学教授の平木典子氏に「家族心理学から見えてくること」というテーマでお話を伺った。

当日のプログラムでは、お二人の講演を受けて、心理教育相談室スタッフである亀口憲治と田中千穂子の方からコメントがあり、その後、お二人の講演者にスタッフの中釜洋子を交えて「家族と学校をつなぐために」というテーマのシンポジウムが行われた。

当日は、新聞・テレビ等の報道関係者も顔をみせるなか、定員120名を上回る聴衆が集まって熱心に講演を聴いたほか、質疑応答の時間にも活発な質問や意見が交わされた。背景には、直前にいじめ自殺が連続して起こったことや、いじめ自殺を予告する手紙が文部科学省に届けられたことなどがあると思われる。本講座は必ずしもこうした出来事を受けて企画されたものではなかったが、登壇者の方々はそれらの出来事に何度か言及しながら議論を進めて下さっている。

以下に掲げるのは、そのうち山田氏と平木氏の講演を起こしたものである。

学校現場から見えてくること

文京区教育委員会教育推進部指導室長¹ 山 田 修 司



ご紹介いただきました文京区教育委員会指導室長をしております山田と申します。今回、東京大学大学院の心理教育相談室のほうで公開講座を開くので、ぜひ文京区の実態を話していただきたいということでお引き受けした次第です。今、さまざまな子どもを取り巻く事件が発生していますが、そのことも緊急の内容であるということで、今回はそれも話の中に含めた形でしばらくの間お話をさせていただこうと思っております。

私の勤めている教育委員会というのは大きな組織で、外から見ると分かりにくいだろうなというのをいつも思っています。私どもは、学校教育のほんとうに地味な仕事というか、基本的で事務的な仕事をたくさんやって

¹ 現在は豊島区立南池袋小学校校長

います。普段は学校教育をどうしていくかというほんとうに事務的なこととか、先生方の給与のことまで、仕事の範囲に含まれています。ただ、生産的な仕事といえますか、方向性を決めていくとかというところも確かにあるわけです。今回のいじめ自殺のように緊急の事態が起きたときには、学校に全部任せてばらばらに対応していったら、Aの学校ではこうした、Bの学校ではこうしたということになってしまい、学校全体が当然、信頼感を失っていくことになります。やはり、一本筋の通った対応をしていきたいと思いますということを、全体の校長先生方に集まっていただいて、お話をしたり協議したりして決めていくというようなことを行う。私どもはそのような仕事をしています。

しかし、今回さまざまな報道等から感じるの、教育委員会という、上から何かもの言わせているなんていうイメージがあるのではないかなということですね。そうではなくて、やはり学校と一体となって支えていくという姿勢をいつももっているというのが、本来の姿です。

今回の公開講座ですけれども、タイトルが「子どものSOSにこたえるために」ということになっています。

「SOS」というのは非常に重い主題です。私も「SOS」というのは子どもからの発信だと思います。今日は、私のほうでまとめた資料がありますので、それを見ながら話を進めてまいります。「SOS」ではなく「サイン」という程度、深刻度からすると、そこまで行ってない内容が中心になるかと思います。

具体的な内容としては、初めにいじめのことについて、やはりこの事態の時ですので少しお話をさせていただきます。その後、教育相談について話します。今、スクールカウンセラーがさまざまなところで活躍されています。平成7年に文部科学省が国の制度として配置をするというところから広がっていった、今は区独自のカウンセラーも入ってきています。最後に、文京区のことを少し知っていただくということで、教育相談の体制と課題みたいなものを含めて思っております。

子どもたちのサインに気づく

まずいじめについてですが、「子どものこころと命のサイン」、「子どもへの接し方」という資料をご覧ください。これは、昨年、いじめではなかったのですが自殺が高校生や中学生の中で実際に起きたことを契機にして、東京都の教育相談センターが資料化して、各学校で研修などに使っていたものです。今回の事件はいじめが

主たる原因となつての自殺ということで、また別の大きい課題になっているとは思いますが。そこで重要になってくるのは、SOSとまではいなくても、資料1に見られるようにサインにどう気付くかということです。ここが一番、学校現場に居るものにとって注意していかねばいけない部分で、気付けるようにしていくために自分をどう高めていくかということを考えていく必要があるのではないかと思います。

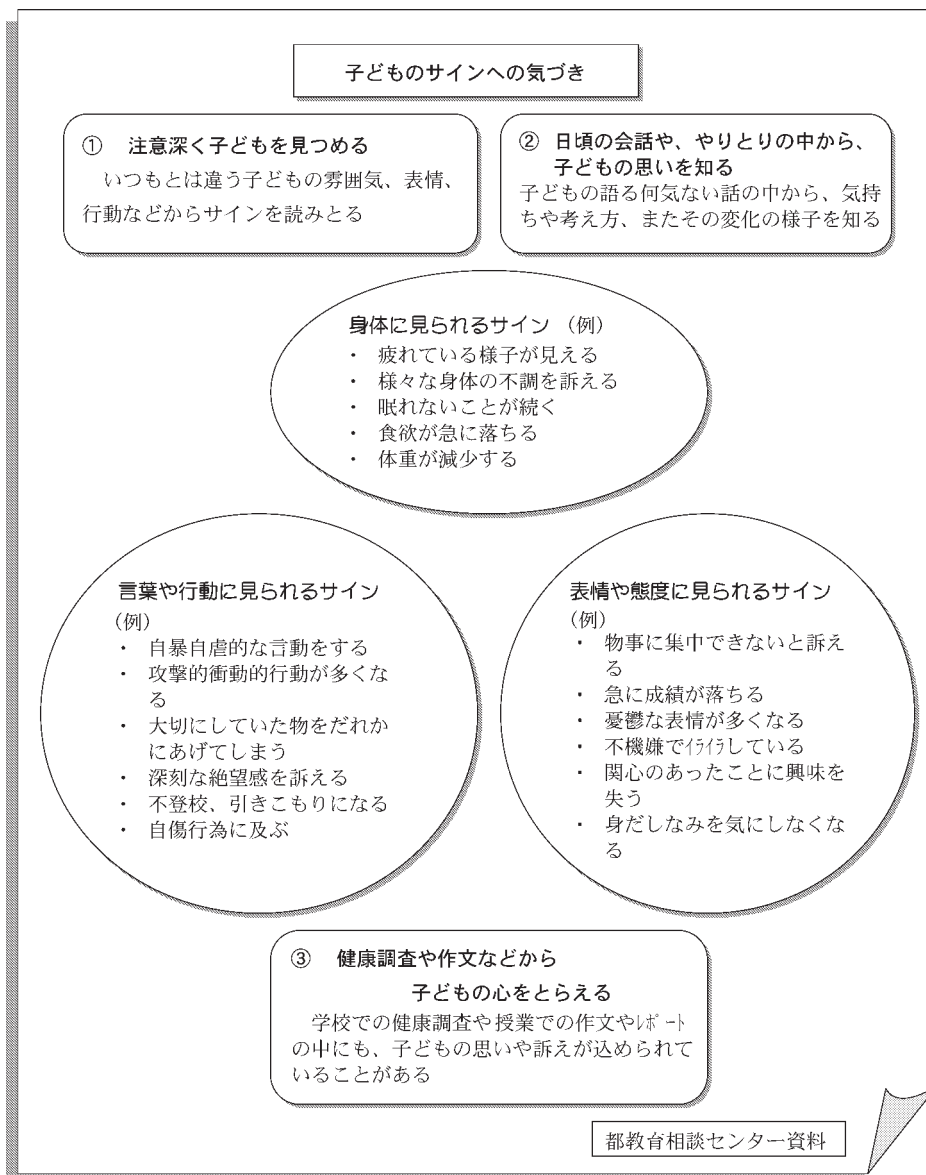
大きく分けて子どもたちのサインには、身体や言葉、行動、表情や態度に関わるものがあります。身体が一番分かりやすい部分です。例えば、健康診断であるということとか、運動をしたりしているときとか、子どもと接していれば見えやすい。それに対して言葉や行動に見られるサインになると、この辺をどう受け止めていくかっていうのは難しい部分があるかと思います。それから、表情や態度、ここになってくるともっと難しい。これは毎日接していて、昨日とのちょっとした違い、あるいは朝から、あるいはクラスの中での過ごした時間を通じてどんな変化が見られるかといったところまで見ていかないとなかなか気づけない部分かなと思います。

学校にいる教員は常にこういう意識をもつことが必要なのはもちろんですが、教員だけではなくて学校にはほかにさまざまな仕事をしている人がいます。例えば、用務や給食担当をしている主事という仕事の方がいるわけですけど、この方たちでも、朝挨拶をするときであるとか、清掃時間中であるとか、給食のワゴンを返しに来たときであるとか、言葉かけを通じて子どもの表情の違いに気付くことは可能です。そういう気付きを先生方に伝えられていくような学校になっていければいいと思います。そういうものに気付いたけれども言えなかったりとか、あるいは伝える場面がなかったりというようなことがあると厳しいでしょう。現実的に子どもがどこにも「逃げ場」—という表現をされることがあるようですけど—が見つけれられないという場合、つまり、子どもが誰かに頼りたいと思うのにそれに気付いてくれる人が少なければ、なかなか厳しい部分があると思っています。

いじめ自殺への対策

ご存じのようについ最近、北海道の滝川市、福岡、また岐阜の方でいじめと思われる原因で自殺が発生しました。東京でも文部科学大臣宛に豊島区内の消印で自殺予告の手紙が届きました。私ども文京区は隣の区ですし、正直申し上げて、豊島区から区域外就学で通われているお子さんもいるということで、当日は全管理職が学校に

資料1 子どもの心と命のサイン



出て待機したり、それから、全体を回ったりという緊急の対応をいたしました。今回のようなこういう事態では当然、できることはすべてやっていこうという方針でやっています。

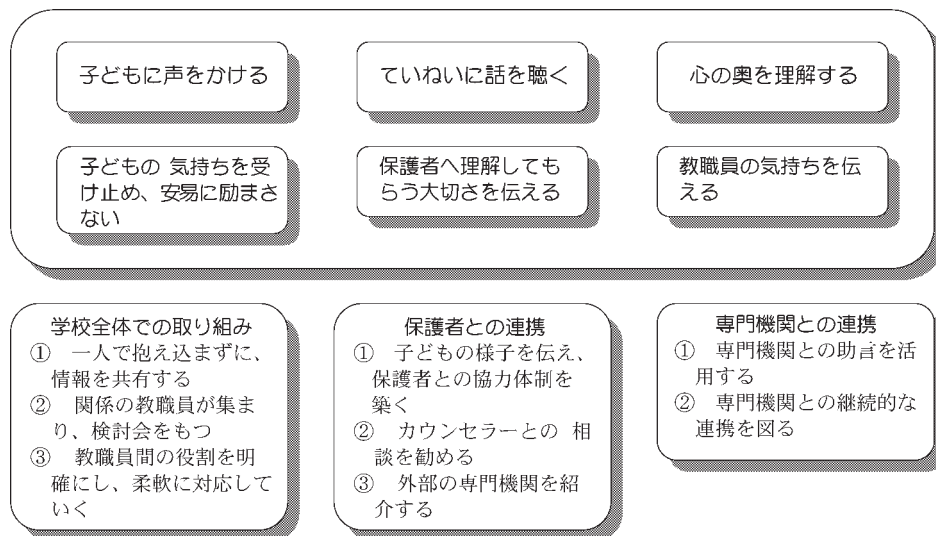
それから、私どもは教育相談室を設けておりますので、そこにいじめ電話相談が設置されています。これは今回急に始めたわけではなくて、もう十何年も前からそのための電話番号があります。普段はどちらかといえばかかってくる件数は少ないんですけども、今回新たにパンフレットを子どもたち用に増刷して配ったということもあって、いつもよりも電話が入ってきているのは事実です。

かかってきた電話の中に、「これから死にます」と言っ

てすぐに切れたというケースがありました。これもほっておくわけにいけないので、そういう事実があったことをすべての学校に知らせています。それから、「安心メール」というメール発信も区役所の方からできるようになっていますのでそれも活用しました。普段はそのメールでは不審者の情報などを流しているのですが、そういう電話が入りましたので、すべてのお子さんの様子を見てくださいということでメールでの発信をしました。とにかく、今できると考えられることをすべてやっていこうというのが、こういう緊急時に必要なことではないかと思っております。

幸いにも、その予告電話に関係がありそうな事件等はなかったわけですが、次の日すべての学校での出欠確認

資料2 子どもへの接し方



をしました。出席している子はいいいわけですが、欠席しているお子さん一人ひとりの確認をしたわけです。特に不登校のお子さんとか、なかなか所在をつかめなかったりした子どももいて、結局最後の一人が分かったのが午後1時でした。そのほか、不登校のお子さんで3日前は学校に電話があって所在はわかっていたんですけども、その日たまたま出かけていかなかったため、なかなか所在が発見できなかったということで苦労しました。とにかく、こういう緊急な事態については、できることからやっていこうというのが私どもの基本的なスタンスです。より一般的な対応については、資料2をご覧ください。

いじめの発生状況と対応

そうしたことの予防のために、私どもが今一番強調しておりますのが、スクールカウンセラーの活用ということです。資料3にある相談実施状況を見てください。この数字がどういう意味をもっているかは、きちんと分析する必要がありますのですが、とりあえず17年度をみておきますと、これまでは相談件数を6項目に分けていました。「いじめ」と「友人関係」というのは一緒になっていて、小学校で600件、中学校で3000件にものぼる相談件数が報告されています。数え方としては、1人の子どもが3日間相談に来たら3件というふうにしているので、これがそのまま、悩みをもつ子どもの人数に対応するわけではないのですが、大変多いというのはわかります。やはり、人間関係をなかなかうまく結べないで悩んでいる子どもたちがいるということは現実です。

平成18年度については、東京都がスクールカウンセラーの報告に求めている項目を整理し直そうということで、4月から項目を変えて「いじめ」を独立させました。これは主訴の一番重いものに入れていきます。例えば、友人関係がうまくいなくていじめられていると思うといった場合には、重い方に、「いじめ」の方に入れているわけです。そこで4月から10月までの「いじめ」の項目を見ていただくと、159件という数字になっています。

平成7年だったでしょうか、愛知県西尾市の大河内清輝くんの自殺があってから連鎖的に自殺が発生することがあったわけですが、そのときも私どもは、いじめがないという認識は全くもっておりませんでした。相談は現実に教育委員会にも来ますし、各学校でもさまざまな相談にのっています。教育センターの方にも相談は入っています。実際に転校を余儀なくされたといった事例もあります。その場合は保護者、学校と私どもが、転校が本人にとって一番いいだろうと十分話し合っています。ほんとうはそれがいい選択なのかどうかは、その時点では分からないのですが、最終的な判断としてそうしたわけです。

いじめとまではいかなくても、人間関係がうまくいかなかったりする子どもはもっとたくさんおります。それが相手の気持ちを考えない言葉になって出たときに、やはり受けとる方の子どもは「いじめられてる」というくらい気持ちになってしまうこともあるわけです。そうした問題を解消していくための方法論として、学校も教育委員会も、さまざま、考えていく必要があるのかなというふうに思っております。

資料3 文京区における相談実施状況

平成17年度 スクールカウンセラー相談件数

内容 対象	小 学 校						
	不登校 不適応	いじめ 友人関係	問題 行動	生活 行動	家庭 家族	教員 個人	計
児童生徒	229	408	202	42	33	1	915
保護者	180	57	191	75	11	0	514
教 員	358	163	857	180	49	54	1,661
計	767	628	1,250	297	93	55	3,090
平成16年度	556	537	880	161	67	45	2,246

内容 対象	小 学 校							小学校 中学校 合計
	不登校 不適応	いじめ 友人関係	問題 行動	生活 行動	家庭 家族	教員 個人	計	
児童生徒	944	2,578	196	135	61	7	1,663	2,578
保護者	478	1,125	80	27	8	0	611	1,125
教 員	1,100	3,411	388	90	42	34	1,750	3,411
計	2,522	7,114	664	252	111	41	4,024	7,114
平成16年度	1,309	4,582	400	230	88	17	2,336	4,582

平成18年度 スクールカウンセラー相談件数（4月～10月）※平成18年度より項目の分類変更

	不 登 校	い じ め	友 人 関 係	問 題 行 動 等	情 緒 不 安 定	性 格 ・ 行 動	生 活 習 慣	身 体 ・ 健 康	学 習 ・ 進 学	家 庭 ・ 家 族	虐 待	対 教 師	部 活 動	自 己 理 解	子 育 て	発 達 障 害	ソ カ ウ ン セ ラ ー の 方 法 リ	学 外 連 携	話 し 相 手	そ の 他	合 計
小学校	247	64	448	356	248	231	32	51	77	90	49	91	1	16	34	368	16	23	505	107	3,054
中学校	1,245	95	280	143	213	235	48	50	83	72	26	61	33	72	37	173	28	37	675	160	3,766
合 計	1,492	159	728	499	461	464	80	101	160	162	75	152	34	88	71	533	44	60	1,180	267	6,820

スクールカウンセラーへの期待

スクールカウンセラーについては、現在は都のスクールカウンセラーが週に1回、区費で雇っているスクールカウンセラーが中学校で週に2回、小学校で週に1回という体制で、平成15年度からようやく全校に配置ができました。スクールカウンセラーの制度そのものが文部科学省によって作られたのは平成7年でした。最初は東京都のカウンセラーのなかでも臨床心理士の資格を持った方自体少なかったわけですが、そういう方に来ていただいて、ようやく今は全校に何らかの形で配置していけるようになりました。

最初は、なかなか先生方の理解が得られないという難しい部分もあったのですが、近年はこのカウンセラーの重要性もわかってもらえるようになってきたと思います。要するに、教科の内容を教えるのは先生ができるわけですが、心理的なケアという面ではスクールカウ

ンセラーがほんとに貴重な存在となりました。資料を見ていただければ分かるように、子どもたちからの相談だけではなくて先生の方からの相談も相当件数が増えてきており、子どもより多いぐらいです。やはり、そういう心理の専門的な部分において、一人ひとりの子どもへどう対応していくかということを相談するケースが増えてきています。

スクールカウンセラーとの関係で、「教育相談体制」についても一言述べておきます。文京区では、1つは教育センターに教育相談室があります。これは、来所相談を受けているところです。それから、子育て支援カウンセラー—これは幼稚園、保育園に向けての相談、特に先生方への相談が主になります。それから3番目がスクールカウンセラーということです。それから、適応指導教室がありますが、これは不登校のお子さんのサポートや問題解決に関係しています。メンタルフレンドは、引きこもりのお子さんに関わります。それから巡回相談員は、

これから特別支援教育が始まりますけれども、さまざまな軽度発達障害のお子さんの学校を巡回して相談にあたります。そういう機能を、今、もたせているところです。

その中で、スクールカウンセラーのもつ意味が大きく今クローズアップされています。特にやはり、子どもたちに直接相談していただけるというところが強みでしょうか。今までは、相談室に来ていただいて相談を受ける、要するに待っていたわけですけども、今のスクールカウンセラーは積極的に授業を見に行ってくれたりとか、あるいは気になるお子さんの話を聞きに行ったりとか、待ちの姿勢ではなくて、学校の中での積極的な関わりを試みていただけています。話を聞くと、ほんとうに時間がないということとか、週に4日しか勤務がない非常勤職であるとか、なかなか厳しい面も多いようです。にもか

かわらず、夜遅くなつての家庭訪問や、どうしても午後5時以降でないとか来られない家庭のお話を聞くために、遅い時間に相談を設定したことなど、そんな苦労も今やっただいていてという現実もあります。

しかし、このスクールカウンセラーの制度はこれからも充実していかなければいけないと思いますし、臨床心理士の養成についてもぜひ大学等での力添えをお願いできたらなというふうに思っております。限られた時間でしたので、雑駁であちらにいたりこちらにいたりということで、なかなか核心をついたお話はできませんでしたが、お時間が頂戴できればお話しをさせていただこうと思っております。

ご清聴ありがとうございました。

家族心理学から見えてくること

跡見学園女子大学教授 平 木 典 子



私は心理臨床の中でも、家族心理学とか家族療法を専門にしておりますので、そちらの観点から、現在の子どものたちのSOSがどのように見えるかという話をさせていただこうと思っております。心理臨床の世界では、先ほど文京区の方の相談内容に見られるような問題について対応しておりますが、社会の変動によってそのとき問題になることが変化しているように感じております。たとえば、少し前までは、不登校の問題への対応がほとんどでした。マスコミで不登校が騒がれると前後して、相談には不登校の問題が多く寄せられます。まもなく引きこもりとか、ニートと呼ばれる問題が増えてきました。

また、教育相談所には多くありませんが、児童相談所では、同じように親による子ども虐待の問題がほとんどになりました。マスコミでも虐待は大きく取り上げられてきましたが、次に今、いじめが大きな問題です。

これらの相談はどれも、子どもたちが出しているSOSですが、学校は「家族の問題だ」といい、家族は「学校が悪い」と責任転嫁をしています。そんなことをしていても意味がないところまできていて、緊急な事態になっています。おそらく、私たちがこれから考えなければならないことは、地域社会で子どもたちをどのように支えていくかということ。そういう意味では、広い意味での子育ての社会化が問われているのだと思います。

今、文京区の方たちのご苦勞を聞き、できることをすべてやっていこうというエネルギーと細やかな心遣いに触れて、そのご苦勞はいかばかりかと想像しておりました。私は、家族の支援をしている立場から、地域社会ができることはどういうことかについて、考えてみたいと思いました。

子どもたちのSOS

子どもたちは今、小さなものから大きなものまで、心

身の症状や驚くような行動を通してSOSを出しています。先ほどの相談の中身などがその証だと思いますが、子どもたちは、大きく二つの方向からSOS出しているように思われます。

1) **心身の症状** ひとつは、心身の症状で、子どもたちの症状としては摂食障害、不登校、自傷などに加えて、最近ではうつも増えています。新たな症状としては、引きこもりとかニートなども現れました。症状として、あるいは動けないという状態を通して訴えていることは、怠けや反抗ではありません。この様な症状による訴え方は、内向した問題の表現であり、自分の内面で起こっている不安や葛藤が症状化していると受け取ることができます。自分か困った状況、参っている状態が症状として表現されており、それを私たちは問題提起として受け取ることができます。つまり、それは機能社会に対する「ついていけない」という訴えだと受け取ってみてはどうでしょうか。高度に機能化され、スピードが速く、しかも、常に課題を遂行しなければならないことのプレッシャーに対して、「私たちはあなたたちのようなスピードや完成度についていけません」、「私たちは機械ではありません」というふうに訴えているのではないかということです。

2) **暴力化傾向** もうひとつの訴え方は、逆に外に向かった形で表現されているものです。それは一言で言うと、暴力化傾向と言ってもいいのではないかと思います。現在、まさに大きな問題になっているいじめや、非行、他害・他傷、凶悪な犯罪の低年齢化などです。私たちがかつて体験したことがない状況が次々に起こっていますが、そんな形で子どもたちが表現していることは何か。それは、「いらいだち」ではないでしょうか。子どもたちは大人の社会に対して言葉で十分表現することができないので、「これはおかしい」と言いたかったり、「それはけしからん」と訴えたかったりしているのではないのでしょうか。感じていることを本能的に怒りやいらだち、あるいは行動で表現していると思います。今、問題になっているいじめを例にとると、いじめる側は、周囲の大人からのさまざまないじめとも取れる攻撃を、自分より弱いものに向けて、怒りやいらだちとして表現していると考えられますし、いじめられる側は攻撃をそれ以上大きくしないように、内向させて耐え、時に心身の症状として表現していると受け取ることができます。この組み合わせによって、問題の正体が見えにくくなっているのです。

この言語化されない怒りの二つの表現形態は、子どもたちが怒りを感じたとき、その場できちんと表現することが困難であることからきています。怒りは、不快感の表現ですから、誰もが感じるのですが、それを表現し

たとき、大人から受け止めてもらえなかった体験があるのでしょうか。その気持ちを受け止めてもらえなかった体験の積み重ねが、大きな攻撃になって表現されるのです。そもそも受け止めなかったのは大人なのですが、それを大人がけしからんとか、その行動は犯罪的だと言っているでも始まらないことです。むしろ、子どもたちの言動をどう理解するかが重要なのです。

3) **違いに対する不寛容** もう1つ、今述べた子どもたちの言動に共通する現象があります。違いに対して子どもたちが非常に不寛容になっていることです。自分と違っている人、違った考えや感じに対して寛容ではありません。その一例がいじめ現象ですが、大人びているとか、成績がいいとか、おとなしいとか、自分とは違っている人を変だと思うのです。違っていることは、おかしいこととして異物視されたり、違いは脅威にもなるので排除しようとしたり、理解しにくいので無関心になったりして、そばに近づこうとしない。あるいは違いをどちらが正しいかという問題にする。つまり、自分が間違っているとすれば怖いし、相手が間違っているとすれば自分に同意させようとすることになるわけです。私は「違い」は「間違い」ではないということをまず大人が確認し、子どもたちが理解することが重要だと思います。子どもたちが示している症状や極端な行動化を防ぐ1つの鍵は、違いを違いとして理解することにあるのではないかと思います。

違いに対する理解不足と不寛容は恐怖を生み、さらに、自分の個性や自分らしさの表現を妨げていきます。子どもたちは孤立化し、他者との交流の中でのアイデンティティの発見が難しく、拡散の状態に陥ってはいないでしょうか。アイデンティティとは、自分の個性とか自分らしさのことですが、いま、人間の共通点と同時に、違いを理解していくことができない状況で、落ちこぼれとか、仲間になれない子どもたちが増えているようです。民主主義とか、個性が大切にされる社会という建前はあまるものの、一方では、みな同じひとつの道を歩むことしか許されていないことになります。つまり、生まれたときから大学に行き、いい就職先を見つめることに縛られて、その道を歩むことができそうもない子どもたちは、落ちこぼれ、ニートと呼ばれて、「それは違う!」という訴えをさまざまな言動で表現し、同時に、子どもたち同士がお互いを追い込んでいるように見えます。

大人のSOS

このような子どものSOSは、大人に対して発せられて

いることは確かですが、では責任は大人にあるかという
とそうとも言い切れません。なぜなら、大人もさまざまなSOSを出しているからです。例えば、家族間暴力の問題です。DVといわれる夫から妻への虐待や、親の子ども虐待、あるいは、老人虐待です。家族の間で暴力が起こっているという現状は、一番近いケアし合うはずの人々が憎しみ、傷つけ合っているということです。また、孤立化した育児の中で、育児不安を抱えつつ取り残され、追い詰められている母親の姿、離婚の増加、介護を負わされた人と介護されている人の高齢化・孤立化など、弱い立場にある人々が、見捨てられていく恐怖があります。職場におけるパワハラやセクハラ、うつと突然死の増加なども、弱い立場にある人が、強い人間から排除されていく不安をかき立てます。弱さを見せると、この世の中に居場所がなくなるのではないかという恐怖は、子どもにも大人にも迫っています。

これらの現象は、実は、家族形態が変化し、その結果、家族機能が変化したことから生じているのですが、それを自覚して、対応を考える必要があることを教えてくれる出来事だと思います。

日本の家族の現状は、産業化が進んだことで、核家族化し、独身者の家族が増え、単身赴任や同居していない家族が増え、再婚の家族や結婚しないで同居している人たちもいて、血のつながった親子が生活を共にするといった常識はなくなりました。家族の形態が変化したことは、家族の機能も変えました。性の解放と生殖医療の発展は、結婚した夫婦とその子どもという家族観を変え、親の持つ子孫の継続とか、子孫の社会化に対する責任は薄れました。あるいは、子どもは「授かる」ものから「つくる」ものになっています。つまり、産みたい人が産むことになってきました。選択可能になってきたことが、すべて悪いわけではないとしても、親の意識は、子どもを自分の思い通りに育てるという方向に向かっています。別の言い方をすれば、社会的な役割を担った子育ての意味は薄れ、自分の思い通りに産んで、育てるという傾向が強くなっています。

家族間暴力とか、育児不安といった問題は、以上のような家族機能の変化と密接に結びついた現象でしょう。

同時に、仕事をしている人々にとって、中高年のうつ、自殺に潜む職場のストレスは、家族生活をも圧迫しています。年齢が上の方たちはお分かりにならないかもしれませんが、今、日本の企業では、30代で月給が頭打ちになるのです。若い人たちには深刻な問題ですが、30代過ぎて役職に就かない限り給料が上がる保証がないのです。競争といわゆる成果主義の方針の下で、日本全体に

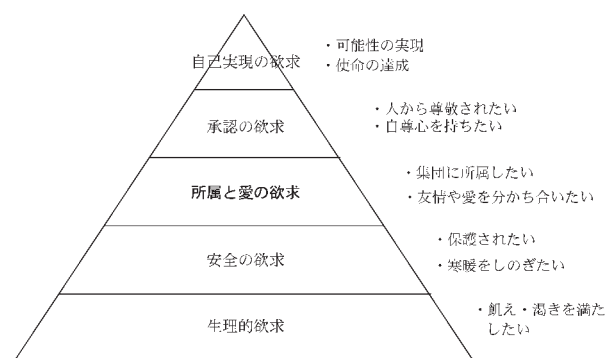
残業と疲労の蓄積が広がっています。多くの人が、一月60時間以上残業（つまり、最低でも1日3時間残業）しており、他の国と比べると、異常な状況です。睡眠が十分に取れてない、朝食をとらない、昼・夜外食、家族と接触する時間はほとんどないというわけです。家族間のコミュニケーションがないところで、お父さん、お母さんは家族のために働いているつもりなのです。

コミュニティの不安安全

子育てが難しくなっていることのもうひとつの状況として、コミュニティが衰退していることがあります。地域社会は安全どころか、危険なところに変わっていきつつあります。子どもが連れ去られ、殺される状況は、子育てが孤立化していることに追い討ちをかけています。そして、環境汚染、災害、戦争など、かつて私たちが体験しなかった脅威にも襲われています。

豊かさの裏に潜む存在の不安定さ

このように考えてくると、子どもや大人が表現している問題は、豊かさ、利便性、成果主義に対する大きな問いと考える必要があるように思います。次の図を見ながら、この現象を理解してみたいと思います。これはアメリカのマズローという心理学者が主張した「欲求の5段階説」を図にしたものです。彼は、人は5つの欲求を満たしながら生きていくと述べ、自己実現という言葉を広めました。



図を簡単に説明しますと、人間は、まず生理的欲求と安全の欲求を満たすことを考える。それらの基本的欲求がある程度満たされると、心理的な欲求が出てくる。人間の仲間として存在をうけとめてほしいと思うようになるということです。存在を受けとめられると、何かを成し遂げて認められ、その成果によって自他の尊敬を得た

いと望むようになります。一人ひとりが、人の中で受けとめられ、自分の能力を発揮して一人前のことができるようになると、最後には、自分ができることをして、自分らしく生きたい、自分になることができる人間になりたいと思うようになるというのです。

日本の現状をこの考え方で理解してみるとどうなるでしょうか。

① **存在よりも成果で判断される人生** 日本の社会では、おそらく生理的欲求と安全の欲求はある程度まで満たされてきました。高度経済成長の中で、私たちは、イラクや北朝鮮のような食住の危険にさらされることはなく、生理・安全はある程度確保されています。マズローは、この二つの欲求は、生命の維持のため基礎的なものだったのですが、実は3番目の欲求を太字で書いたことに私の託したい意味があります。「所属と愛の欲求」とは、集団に所属したい、友情や愛を分かち合いたいという欲求ですが、今までお伝えしてきた子どもたちの姿は、この欲求が満たされていないという訴えであるように思います。子どもたちが出しているSOSは、「自分の居場所がない」「自分をありのまま受けとめてくれる人がいない」ということ、つまり所属と愛の欲求が満たされていないことを示しています。つまり、「あなたはそこに居ていい」「私がしっかり受けとめます」と言って欲しいということです。このメッセージを子どもに対して出すのは、基本的には親でしょうし、保育園や学校の先生たちでしょう。「あなたが何か特に優れたことができなくても、あなたが人間としてそこに居ることに意味がある」というメッセージを出す人がいない限り、存在が危うくなるのです。

虐待をされている子ども、いじめられている子どもたちは、「居場所がない」と言いますし、誰からも大切にされていない感じを持っています。そして、その裏では、「あなたは〇〇ができるようになりなさい」、「いい成績をとらないと、うちの子ではありません」といったメッセージが伝えられています。つまり、「所属と愛の欲求」を満たす前に、「承認の欲求」のところで大人がかかわり始めてしまうのです。何かができた、できないで子どもを認めたり、認めなかったりすると、子どもはできないうち、見捨てられる不安におびえます。

確かに、親は成果を上げるべく仕事をしています、それと同じ論理と価値観で、子どもの習い事や成績にエネルギーを注いでいるのです。社会全体がもっている成果主義の課題は家族全体にも及んでいて、子どもが帰っ

てきたときに「今日宿題ないの」と聞いてしまう親は多いのです。今日はどんな一日を過ごしたんだろうと顔色を見る前に宿題を問い、「はい、次はおやつ」、「次は塾」となって、おやつまで課題になっています。ケアしているというメッセージやかかわりは減り、子どもたちは課題を遂行するマシンのように動かされて、心身の症状や、苛立ちの言動を発しているのではないのでしょうか。

そうすると、健康の維持や回復、人間関係の維持や支えなど、心身の健康を土台とした行動は得られず、不安定な土台の上に課題が積み上げられていくという様相を呈することになります。逆に、課題を達成することでしか認めてもらえず、健康な生活までも保証されないことになっているのです。豊かさの中で食事や睡眠は軽視され、所属と愛の欲求は無視されて、課題に駆り立てられているのです。

② **子どものSOSはどこへ？** 先ほど、学校では、子どもたちのSOSのサインを一生懸命見とろうとしてみてくださいでしたが、子どもたちにとって家庭も学校もサインが出せるような環境ではないのかもしれませんが、子どもたちは、出しても誰も気がつかないし、見てくれないことがわかっているのでしょうか。おまけに、IT社会の実現は、接触の少ない家族たちの日常に、デジタル化されコミュニケーションを持ち込みました。つまり、記号と手順と理屈で人々がつながり、そこには人のぬくもりとか、細やかなニュアンスを伝える非言語的なメッセージは使われなくなりました。いくら絵文字を使っても、言葉というデジタル信号は、表情や声・身振りなどが伝えるメッセージを伝えることはできません。人と人がつながりを実感できないやり取りの中で「承認の欲求」を満たして生きていくことは、いかにも不安であり、苦しみでしょう。

これでは、自己実現の欲求には到達し得ないだけでなく、この世にいても意味がないと思うかもしれません。この現実には、家族や学校が分担して解決するといった問題ではないでしょう。私たち大人一人ひとりが置かれた場で、意識して周囲の人々に働きかけていくしかない現代的課題だと思います。いじめにあつて死を選ぶところまでエスカレートしないと、大人は動いてくれないと訴えている子どもたちのSOSは非常に厳しいものであり、私たちはその現象だけにかかわるのではなく、その裏にある子どもたちの存在の不安定さにかかわっていくことが必要なのではないのでしょうか。

どうもありがとうございます。